

## 京丹後市における若手アグリビジネス起業者のネットワーク構築

### ・事業内容

本事業の実施地域は、京都府下でも特に人口減少及び高齢化等の進行が大きな課題となっている京丹後市である。本市は、地域外の人材を招聘し、その定着を図るとともに、若者等の定住及び地域の活性化等を促進するために、平成 22 年度から継続的に「地域おこし協力隊」を設置している。これら隊員の任期終了後の動向は、そのまま本市に定住している者が 6 割以上で、その一部は若手アグリビジネスの起業者として事業展開しており、本市での次世代の担い手・リーダーとして期待されている。また、若手起業者はそれぞれの特性を活かしたビジネス展開を行っており、多種多様である。しかし、本市では多種多様な若手アグリビジネス起業者の存在を確認できるが、その多くは個人としての活動が主であり、地域内にあるネットワークを活かした多面的な活動には至っていない。

そこで、本事業では、これら若手アグリビジネス起業者のネットワークの現状がどのようになっているのか、ヒアリング調査によりその構築を明らかにし、京丹後市における地域活性化に果たす効果を検討・提言することを目的に行なった。

### ・事業実績

#### 1. 事業対象者の概要

本事業では、以下に示す 6 名を対象者とした。A、B、C はアグリビジネス起業者である。一方で、D と E は厳密にはアグリビジネス起業者とはいえないが、D はアグリビジネス起業者の移住支援に貢献しており、E は市内でコミュニティツーリズムを通して、アグリビジネス起業者を対象としたツアーを提案し、実施しているため、広義的にアグリビジネス起業者として見なすことが出来ると考えた。また、これら対象者は全て 30～40 代の男性であり、京丹後市における次世代の担い手・リーダーになり得る人物と考えられる。

#### 2. 若手起業者が有するネットワークの実態

対象者の京丹後市内を中心とした仕事上でのネットワークをみると、京丹後市での若手アグリビジネス起業者は多種多様な業務内容であること、京丹後市を中心とした仕事上のネットワークが存在していることが確認できた。特に、第 1 次産業の生産・加工・販売に携わる A～C は同業種のつながりが多いことが特徴である。一方で、第 3 次産業である D と E は京丹後市内外の業種を問わず、多数の人との緩やかなつながりがあったことが特徴として挙げられる。

表 1 調査対象者の概要

	拠点	業務内容	IU	前職の業務内容	移住年	起業年
A	久美浜	地域商社、農産物の加工、GT	Iターン (京都市)	地域おこし協力隊	2013	2016
B	久美浜	有機農業、現農薬の農産物の生産、販売	—	会社員	—	2007
C	網野	食品加工、GT	Uターン	地域おこし協力隊	2018	2020
D	峰山	移住者支援、イベント兼コアワーキングスペースの運営	Iターン (東京荒川区)	移住者コンシェルジュ	2017	2019
E	網野	観光業	Uターン	観光業	2012	2019

### 3. 若手アグリビジネス起業者のネットワークの図式化

京丹後市の若手アグリビジネスの起業者が地域内で仕事上のつながりがある場合は実線、プライベートのつながりがある場合は点線でそれぞれを結んだところ、図1のようにネットワークを図式化することができた。

久美浜町在住の農産物加工販売を行うAとBを含む久美浜の農家は農業に関する仕事上のつながりはもちろん、プライベートでのつながりがあり、旧町単位での結束が強くみられた。一方で、居住地外の農家とのつながりをみると、仕事上はあるものの、プライベートのつながりは一部にはみられる程度であった。一般的に日本の農山村は家族(イエ)と集落(ムラ)を基本とした社会構造を成しており(神谷監修, 1967)、久美浜町の農家は地縁的凝集性のある従来のネットワークが今なお維持されているといえる。また、移住者支援を行うDも職場と同じ網野町に居住する人との関わりが70%と高くなっていった。これら関わりのある人たちのうち42.9%が移住者であったが、地縁的凝集性の高いネットワークが網野町でも機能している要因として、Dが提供しているイベント兼コアワーキングスペースという場が移住者と在住者やUターン者を結びつけることに効果があるといえ、Dが網野町において地縁的凝集性の高いネットワークの形成に寄与していると考えられた。

一方で近年では、生活圏の広がりに対応した多重的な農村社会システムが必要とされており、従来の範疇である農業集落や地区を超えた、旧村さらには市町村域という広域で形成されるネットワークが注目されている(川手, 2011)。京丹後市では、京丹後市内外の業種を問わず、多数の人との緩やかなつながりがあるDとEの存在が、広域で形成されるネットワークに欠かせない。Granovetter(1974)は、人とのつながりには、家族・親しい友人や知人・学校や職場の同僚といった人々との間に存在する「強い紐帯」とあまり親しくない友人、会う機会の少ない疎遠な知人等の間にある「弱い紐帯」があり、日常生活を共有している人との強い紐帯よりも日常生活を共有していない人との弱い紐帯でつながれたネットワークの方が収集できる情報の幅が広がると述べている。また、異なった社会サークルを結ぶ弱い紐帯には情報収集機能があることも踏まえると、弱い紐帯を京丹後市内で多数持っているDとEは、地域での情報収集機能を有していると考えられる。加えて、DとEのコアワーキングスペースという場は、自身の持つ弱い紐帯を結びつける場の創出になっており、地域内で新たなアグリビジネスの展開に期待できるといえよう。

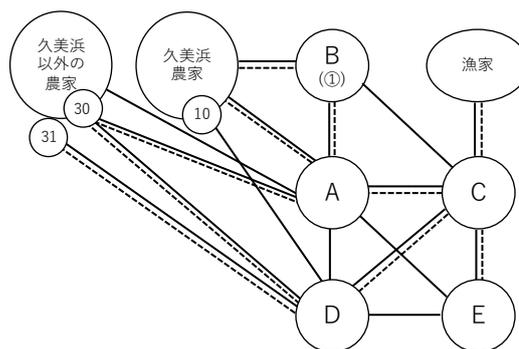


図1 調査対象者のネットワーク  
 註) 実線は仕事でのつながり、点線はプライベートでのつながりを示す。

#### 参考文献

神谷慶治監修／山村振興調査会編(1967)『日本の山村問題』東京大学出版会  
 川手督也(2011)「むらの変貌と農村社会再編の展望—連帯経済の構築と自給の再評価」『農村計画学会誌』、30(1)、36-39  
 Granovetter, Mark(1974) "Getting a Job - A Study of Contacts and Careers" Harvard University Press